

扉が開いてしまいました

リョータイ

2013年 7月12日、金曜日。

夏本番に近づくとつれ、少しずつボリュームを上げる蝉の声。

窓から入る風がカーテンを揺らす。

今日の最後の授業は古文だった。いや、英語だったかもしれない。そんなことはもうどうでもよかった。

夏休みを前に浮足立っていた僕たちは、来たるべき夏休みを謳歌する計画を練るため、仲のいい友達同士がグループを作り、席をひっつけたり、机に座ったり、それぞれがそれぞれのスタイルで会議を行っていた。

教室に響く誰の声ともわからない喧騒。

みんながみんな楽しそうで、顔色、声の色に、溢れんばかりの明るみを帯びている。

突如ガシャン、と椅子が倒れた音がした。

.....犯人はクラスのお調子者、狛田だった。出席番号は8番。

なんてことはない、彼が斜めに座ってバランスをとっていた椅子が、彼の体ごと倒れた音だった。

クラスメイト達はみな、一瞬は狛田の方を見るが、一笑いした後、すぐに自分たちの議題へと戻って行った。

物音の発生源の狛田でさえも、同じグループの奴らにひとしきりからかわれた後、何事もなかったように、先程まで行っていたバーバルコミュニケーションを再開したようだ。どんなことが起こってもこの喧騒は止まらない。

僕ら、成長期の少年少女の希望あふれる夏休みトークは、どんなものにも邪魔はできないのだろう。その時の僕は心の底からそう思ったのだった。

そんな僕、田辺太一は、彼ら、彼女らのグループのどこにも属さず、ただただ、初夏のつきぬけるような青空を眺めていた。

窓際の、一番後ろ。この席は外を見るのにちょうどいい。

飛行機が、轟音を立てて空を切っていく。雲の軌跡で二分される青。

このまま帰りの会が始まるまでの間に、

コンビニのアイスクャンディーのように、ゆるやかに溶けて死んでいけたなら、なんて幸せなのだろう。

ガラガラと、教室のドアが開かれた音がした。ようやくか、そう思い、音の方へと目をやる。現れたのは、予想にたがわず僕らの担任。京先生だ。

体育教師らしく、上下赤いジャージにサンダルというスタイルで、

クラス25人分のプリントと何かのファイルを持っている。

時計を見ると、帰りの会が始まる時刻を、とうに12分は過ぎている。教育者にあるまじき遅刻だ。

しかし、僕以外の生徒はほぼ先生などに興味がないようで、各々、楽しそうにおしゃべりを続けている。

「みんなー、聞いてくれー。」

先生が言った。みんなのざわめきは止まらない。

「今日はみんなに大事なお知らせがあります。」

先生が言った。ざわめきはまだ止まらない。

「先生もな、夏休み前に、こんなこと言いたくないんだよ？ それだけはわかってほしいんだが……」

先生は続ける。ざわめきも、続く、続く。

「扉が開いてしまいました。」

教室に音がなくなった。

「……これは大問題です。

このままでは、あっちの世界とこっちの世界が繋がってしまい、大変なことになります。」

「ちょ、ちょっと待ってください！」

生徒たちの沈黙を破り、眼鏡の女の子が、挙手をしながら立ち上がる。

出席番号12番、竹田さんだ。

声も体も、震えている。

当然だ。

もし本当に、扉なんぞが開いてしまっていたのなら気が気じゃない。僕だって、そうだ。

それでも竹田さんは精一杯に凛と立って、言葉が続けようとしている。

クラスの中では小柄な体型の部類の彼女だが、今はとても大きく見える。

その理由の一つに彼女の背筋の正しさがあげられる。……さすが委員長だ。

「何だ、竹田？」

「ほ、本当なん…… ですか？ これまでだって13年間、な、何もなかったのに、

私たちの代で、そんな…… だって……」
ほとんど泣き声だった。最後の方は、もう何も言えてなかった。

「残念ながら、本当だ。でも大丈夫だ。先生はお前たちのことを信じている。」
京先生はそう言った。馬鹿みたいにさわやかな笑顔だった。
わあ、竹田さんは席に座った途端、机に顔をつっぷして泣き始めた。
さっきまで彼女と近くで話していた木津さん、山田さんが「大丈夫？」と声をかけ、慰め始めた。

「間違いってことも～、あるんじゃないですか？」
狛田の明るい声がした。
いや、できるだけ明るく振舞っている声、かもしれない。

「いや、狛田、間違いじゃない。D T Dの調査報告だからな。
みんなも歴史の授業で習っている通り、前回 扉が開いたのは2000年。
その時からもう13年も経ってるからな。年数的にもじゅうぶん、ありえる。」

先生が来る前の楽しかった雰囲気など、もう教室のどこにもない。
みんながみんなそれぞれに驚き、悲しみ、うろたえていた。

先生は言葉を続ける。
「その前は…… えーと、1972年だったか？
今回は、まあペースとしては…… 短いっちゃ短いけど、
過去には10年足らずで扉が開いたこともあったからな。想定の内だな。」

第十一次ノックザドアは1971年だろ……
僕は、頭の中で京先生の脳みそを否定しつつ、
馬鹿みたいに真剣な表情をとりつくろった彼の、次の口の動きを待った。
いや、僕だけじゃない。クラスみんな全員が、先生がこれから何を言うか、とても気になって
いるはずなのだ。
……正確には何を言うかじゃない、誰が呼ばれるか、だろうけど。

「で、さっそく、このクラスの誰かに、扉を閉めにいってもらわないといけないんだが……」
教室に緊張が走る。みんながいっせいに目配せをする。
いったい、誰が…… 誰が扉を閉めにいくのか。

「今日は、えーと…… 12日だっけ？」

親友に慰められ、やっと落ち着きを取り戻した竹田さんの背中が、再び震え始めた。京の奴は、手に持っているファイルの中の出席表を見つめている。

「出席番号12は…… 竹田か。」

()の中に入る前置詞を答えさせるように、
"ただならず"の意味を尋ねるように。
……そんな適当な方法で、僕たちの運命が決まってしまうのか？

あんまりだ。あんまりじゃないか。
扉を閉めに行くのは僕たちで、先生は扉を閉めに行けない。
例えそうだとしても…… それは、とても…… あんまりだ。

「あ…… ああ、あの、私……」
押し出すようにつぶやかれた声。竹田さんの顔はもう真っ白だ。

「ん、何だ…… っておい、大丈夫か？ 顔色が悪いぞ竹田。」
蝉の声がうるさい。蒸し蒸しした空気が重い。息が苦しい。
この教室に今、大丈夫な生徒なんて、いるのか？

と、ここで先生は、よりもよって最悪なことを言い始めた。

「あ、先生、大事なことを言うことを忘れてたよ。」

なんだか、嫌な予感がする。
蝉が鳴いている。

「本日は、まだ扉が開いて間もなく、空間が不安定なため
扉を閉めにいくことができません。よって、"入室"は明日からとなります。
各自、今日は早めに帰って、ゆっくり体を休めるように。」

蝉の声が大きくなる。
心臓の音がいつもよりはやい。
シャツが汗と共に体にひっつく。
はやく帰ってシャワーを浴びなければ。
シャワーを浴びて、エアコンをつけて、まだ読んでなかった漫画がいっぱいある、
コンビニでアイスを買って、あ、自転車のパンクも直さなければいけなかった、

それで、

「というわけで、明日の7月13日から、みなさん頑張って行きましょう。
出席番号13番、田辺くん。最初の犠牲者になってください。」

蝉の音がうるさい。

出席表

1	伊勢田 一郎	(いせだ いちろう)	男	
2	小倉 雄大	(おぐら ゆうだい)	男	
3	大久保 風太	(おおくぼ ふうた)	男	
4	上鳥羽 雲行	(かみとば くもゆき)	男	
5	木津 波子	(きづ なみこ)	女	竹田と仲良し
6	久津川 白土	(くつかわ はくと)	男	
7	興戸 剣太	(こうど けんた)	男	
8	狛田 笑吉	(こまだ しょうきち)	男	お調子者
9	十条 清哉	(じゅうじょう せいや)	男	
10	新祝 花蓮	(しんほう かれん)	女	
11	高原 真知	(たかはら まち)	男	
12	竹田 琴美	(たけだ ことみ)	女	
13	田辺 太一	(たなべ たいち)	男	最初の生徒
14	丹波 豆太郎	(たんば まめたろう)	男	
15	寺田 直行	(てらだ なおゆき)	男	
16	東寺 亮	(とうじ まこと)	男	
17	富野 勇気	(との ゆうき)	男	
18	平城 国和	(ひらしろ くにかず)	男	
19	伏見 竜	(ふしみ りゅう)	男	
20	宮津 玲子	(みやづ れいこ)	女	
21	三山木 夏夫	(みやまき なつお)	男	
22	向島 光	(むかいじま ひかる)	男	
23	桃山 醍醐	(ももやま だいご)	男	
24	山田 海美	(やまだ うみ)	女	竹田と仲良し
25	大和 一斗	(やまと ひとつ)	男	

不透明な土曜日

京都の夏はとにかく暑い。

僕ら、3年鍵組の生徒は全員、

2年前の春、高校進学と同時に全国各地から集められ京都に住むことになった。

クラスのほとんどが同じ寮に住んでいる。不思議なことに男子寮と女子寮というふうに分かれてはいない。

頬をつたう汗をぬぐう。ペットボトルのお茶はもう空だ。

けたたましく鳴り響く蝉の声、それもそうか。遠目には大きな山が見える。

そのいたるところから求愛の大合唱が聞こえてくるようで、僕は辟易した。

かれこれ京都の夏は3回目だが、この蒸し暑さには慣れる気がしない。

暑いからといって、冬はすごしやすいかということ、全くそうではない。盆地ゆえ、冬は寒いのだ。

「ここから先は、お前1人で行くことになる。がんばれよ。

なあに、お前の力なら大丈夫だろう。」

隣にいる京先生が、僕を見降ろしながら言った。

寮の最寄り駅である一乗寺駅から、稲荷駅まで、この男と二人で来たのだ。

「4%、でしたっけ。」

この日、僕は初めて彼に口を開いた。

「ん？ 何がだ？」

びっくりしたような顔に、笑みをまぜつつ聞き返された。

僕にはその顔が、イイ先生を演じて悦に入っている者の顔に見えた。

「……生きて帰ってこれる、確率。」

扉について

- この世には、裏の世界がある
- こっちの世界と裏の世界を繋ぐもの、それが扉
- 扉は定期的にかかれる
- 扉が開く場所は京都府が多い 何かの力が集まる中心なのだと考えられている

- 扉が閉じられて再び開くまでの期間については1年～30年弱と不規則
- 扉が開かれる理由については未だ詳しい事がわかっていない
- 開いたままの状態にしておくと 世界が崩れて消滅してしまう
- 最初に扉が開かれたのは1854年 安政の大地震も扉が原因であるとされている
- 扉が開くと、周囲に異界と呼ばれる空間が生まれる

扉についてわかっていることは、これくらいだ。

一応授業で「扉」の科目はあるが、「第二次ノックザドアで扉を閉めた少女の名は？」などという何の役に立たないことを覚えさせられるだけだ。

大人にもよくわかってないものを、無理やり子供に教えようとしなくてほしい。

.....異界についてもそうだ。

簡単に言えば、入るたびに形が変わる不思議のダンジョンみたいなものらしい。

それ以外、人が把握できている異界の情報はあまりに少ない。

そして困ったことに僕はローグ系のゲームが苦手だ。

異界について

- 扉を閉めるためには異界に入室しなければならない
- 一度入室すると、簡単に戻ってこれない
- 異界に入室することができるのは思春期の子供のみである（16～18歳までの高校生が望ましい）
- 世界に干渉してしまうため、入室するのは1人ずつが望ましい
- 異界内部の法則性は入室するたびにまったく別物になる
- 入室するたび色を変える異界だが、6フロアの構成であり、それは常に変わらない
- 異界に入室するとほとんどの電子機器が使えなくなる
- 異界には 扉を閉めるのを阻止しようとする何かが存在しており、それらは異物と呼称される
- 入室した子供が無事に6つの扉を閉めることができれば成功
- 途中で入室者が絶命した場合、それまで閉じた扉は全て解放される
- D T Dの青少年施錠システムが作られてから、確認されている成功確率は4%
- 絶命した子供の遺体は、異界への入室を試みた場所に戻ってくる

今ので教科書に載っている扉と異界の知識は全てだ。

日本にもドアトゥードア、通称DTDという組織があり、約100年も前から熱心に研究しているが、

現在彼らが教科書に載っていること以外で認識していることは

「扉が今開いているかどうか」「京都のどこに扉が開いているか」その2つだ。

21世紀にもなるというのに、子供を犠牲にして扉を閉めるというアナログな対処法しかできていないなんて、

全く笑える有様だ。技術の進歩の遅さに腹が立つ。

京先生に別れを告げ、僕は目の前の山を見上げる。

緑の木々の中にそびえたつ、たくさんの赤。

これがあの有名な千本鳥居だ。

吸い込まれそうな門の羅列に足を進めながら、僕は昨晚のことを考えていた。

寮の食堂で、最後の晩餐を行った。

いつもなら仲のいい者同士同士、勝手に食事をしている食堂だが、

扉が開いたこと告げられた、この7月12日だけは、みんなで食べることになった。

クラスのムードメイカーである粕田と、人一倍友達思いな性格の山田さん。

この2人の提案だ。

もし普段通りの生活であれば、僕は1人食事をして、自室に戻り、

テレビの音声をBGMに、漫画を読んで1日を終えていただろう。

夜更かしもし放題。それもそのはず。だって世間は、いわゆる花金だ。

しかし、この日は違った。

とても賑やかな晩御飯、こんな感覚、久しぶりだった。

寮住まいじゃないクラスメイトも、今日だけとは、食堂でのディナーを共にすることになった。

とても楽しかった。

僕はエビチリ定食を食べながら、初めて心から、友達と会話をすることができた気がする。

今までの学生生活、お世辞にも人とうまく接することができなかった僕が、

昨夜だけは主役だった。

クラスでは、京都に越してきてからは友達があまりいなかった。

.....引っ越す前もいなかったのだが。

1日中、誰とも口を聞かず授業を受け、自室へ戻る。

そんな日も多々あった。

クラスでの僕は透明だったのだ。

誰にも話しかけられず、誰にも話しかけず。

ただただ外の景色を眺めている、何にも関渉しない存在。

僕はまるで空気のような、透明な人間だった。

そんな僕が、今、クラスの中心にいる。

世界の希望を背負っている。

なんだか、おかしい話だ。

狛田は相変わらず明るく話しかけてくれた。大丈夫だって。

素行不良だと噂される宮津さん。実家住まいな彼女も晚餐に参加してくれていることには驚いた。

僕は宮津さんの、一匹狼な態度、氷のような目つきがなんとなく好きだったのだ。

興戸は無口ながらも、僕を励ましてくれた。絶対に生き残れ、と。

他にもたくさん、みんな、いっぱい僕に話しかけてくれた。

鳥居をくぐる。

「頑張れよ」

鳥居をくぐる。

蝉の音がうるさいな。

「案外お前の力なら、大丈夫だったりしてな」

鳥居をまたくぐる。

ミンミンミン……

「いつもエビチリ食べてるね」

また鳥居だ。

タオル、持ってくればよかった。

「田辺、案外おもしろいじゃん」

「もっと早く仲良くなってりゃよかった」

「絶対扉 閉めてこいよ」

「お前ならできる」

鳥居をくぐるたび、

昨夜かけられた言葉が音声とともによみがえってくる。

眠りにつく前に実家に電話した。

父さんも母さんも、テレビを見て扉が開いた事を知ったらしい。

最初の入室者の名前が自分たちの息子の名前だった。彼等は1日中泣いていたそうだ。

ミーンミンミンミン

一本、もう一本、赤いゲートをくぐっていく……

雑念を振り払うように…… 一歩、一歩。

ティーシャツが汗でビショビショだ。

ミーンミンミンミンミン

ピタッ

突如世界が変わった。

さっきまで鳴り響いていた蝉の声はもうない。

緑の木々も、鳥居の赤もない。

僕が今いる世界は、なんだか、昔の学校の校舎のようだった。

窓から風が吹いてくる。案外気持ちがいい。

ここが…… 異界？

ヴヴヴ!!! ヴヴヴ!!!!

いきなり胸ポケットが振動する。

あまりの出来事に僕はびっくりしてしまった。

振動の正体を確かめる。

京先生にもらった、通信機だった。

携帯電話より少し大きい。赤く光っているボタンを押す。

「はい」

「おっ 田辺、無事…… 異界に入室……ガガ できたよう…… ガガガな」

先生の声は妙に雑音が入っていた。

普通の電子機器では、こうやって異界間で話をするすらできないのであるから
きっとこの通信機はすごい技術のものであり、これくらいの不具合は仕方ないのであろう。

こちらの声にも雑音が入っているように聞えるのであろうか？

「一応。」

「そっちガガガ…… どんな感じだ？ 何が見える？」

辺りを改めて見回す。

「学校のような場所にいます。妙に古い校舎です。あ、外に桜が咲いています。」

桜の花びらが風に乗って、外から校舎へ入ってきた。

僕はそこまで無意識に歩いて行く。

「ガガガ気を付けろよ、もう奴ら、異物が近くにいるかもしれないからな…… ガガ」
「わかりました。」

「まずガガガガガ おガガガ すべき事 ガガガガ————」

ゆっくりと歩きながら会話をしていたが、
電波が悪い場所にはいつてしまったのであろうか、急に先生との通信は途絶えた。
こちらから通信しようとしても、返ってくるのはツーツーツーという悲しい音だけだった。

急に僕は不安になった。
なんでこんなところに、1人で、死ぬかもしれないのに、僕は……

異界に暖かな春の日差しがなければ、
綺麗な桜がなければ、
穏やかな気候じゃなければ、

もしかしたら僕は発狂していたかもしれない。

心の底から、
「春が好きでよかった。」なんて、能天気なことを思った。

ヴヴヴヴヴ

通信機が震える音が聞こえる。おそらく先生だろう。
さきほど途切れてしまった話の続きでもするのだろうか。

ヴヴヴヴヴ

あれ。おかしいな。

不思議なことに、胸ポケットは振動していなかった。

ヴヴヴヴヴヴヴ

音はどんどん大きくなる。

よくよく考えたらそれは胸ポケットからでている音ではなくて、廊下の奥の方から聞こえる音だった。

ヴヴヴ ヴヴヴヴヴ

音は段々近づいてくる。

僕は唾を飲み込むこと以外は、微動だにできなかった。

ヴヴヴヴヴ。

何かが。

影のような、人の形をした何かが、

廊下の曲がり角から、こっちを覗いていた。

正確には顔がないので、こっちを見ているかはわからないのだが、とにかく、こっちを見ていた。

初めて見た。

たしかにソレを初めて見たのだが、その瞬間。
これが『異物』なのだと理解した。

扉を閉めに来た僕を…… 探しに来たのであろうか。

ニタァ。

その時たしかに、僕には
顔のないソレが、不気味な笑みを浮かべたように見えた。

同時に、そいつの黒い手のようなものが、こちらにすごい勢いで伸びてきた。

あヤバ

そう考えると同時、ほとんど無意識的に力を使った。
使用限度がある力だが、今使わないと死ぬと思ったし、現に使わなければ死んでいた。

手のような何かは鋭利な槍のように変形しており、
僕の頭があった空間を貫き、後ろの壁に穴を開けていた。

辺りに舞う埃。
日差しが透き通って輝いている。

僕の体は、黒い影を見た瞬間から動けなくなっていた。
だけど僕には、体を動かさずとも相手の攻撃をよけることができた。

D T Dの青少年施錠システムについて

- 全国の特異な力を持った子供を集め、扉を閉めるための育成をする
- 育成場所は、扉の出現確率が高い京都、下鴨高校。可能な限り寮生活を行わせる。
- 彼等は鍵組という特別な学級に在籍させる
- 在学中に扉が出現しなかった場合は何事もなく卒業できる 社会に出た際、特別支援制度あり
- 在学中に扉が出現した場合は、3年鍵組の生徒を異界へと入室させる
- 全員が失敗した場合は2年鍵組、次は1年鍵組へと、入室義務が移る。
- 生徒に逃亡、反逆などの意思が見られた場合は要対処

クラスメイトの中ではとても地味な力だった。
しかしこの力でなければ、僕は頭を貫かれて死んでいたことだろう。

黒い影が首をかしげたように見えた。
伸びた手が、何かをさぐるように右往左往している。

どこを探しても無駄だ。
だって今僕はどこにもいない。

空気みたいに透明なんだから。

出席番号 13 番、田辺太一 『特技は透明になること』